

【論文】

神奈川県立歴史博物館所蔵大勝金剛像に関する一試論

樋

口

美

咲

【論文】

神奈川県立歴史博物館所蔵

大勝金剛像に関する一試論

樋口美咲

はじめに

神奈川県立歴史博物館が所蔵する大勝金剛像（以下、歴博本）（図1）は、神奈川県立歴史博物館の前身・神奈川県立博物館の開館準備の段階で一九六七年十二月二十一日に購入されて以降、当館の名品として紹介されてきた^①。しかし張りのある肉体表現からその制作が十三世紀に遡り、数少ない大勝金剛像の中世仏画作例とする以上の研究は進められてこなかつた。

【キーワード】

大勝金剛 恵什 『瑜祇經』

【要旨】

大勝金剛は『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』を唯一の典拠とする尊格で一面十二臂に表される。おもに敬愛法や息災法等について修される大勝金剛法の本尊である。

本稿で取り上げる神奈川県立歴史博物館の大勝金剛像は、金剛杵と金剛鈴を腹前で執る点に特徴がある図像で、画像作例のなかに類をみない。この特徴的な図像が仁和寺・惠什所伝の図像と一致することに注目し、惠什所伝の図像の由来や相承のようすを事相書類に確認すると、惠什の図像が大勝金剛を十二臂大日とする尊格理解とともに相承されていたことがわかつた。惠什の習いは狭義の小野流で相伝されおり、なかでも勸修寺流諸師の事相書類にそれを重んじていたようすが認められることは、当館所蔵の大勝金剛像の制作背景を物語つ正在と考へる。



図1 神奈川県立歴史博物館蔵大勝金剛像

大勝金剛は『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』（以下、『瑜祇經』）のみを本拠とする尊格で、敬愛や息災、兵難を避けことなどが期待される大勝金剛法の本尊として、その独尊画像あるいは大勝金剛曼荼羅が懸用された。しかし現存する大勝金剛の画像作例は決して多くない。単独で描く画像は歴博本の他に、京都・東寺本や大倉集古館本、愛媛・石手寺本が確認され、別尊曼荼羅では京都・悲田院本大勝金剛曼荼羅や、京都・醍醐

酬寺本、高知・金剛福寺本が知られる程度である。一方、図像集などではいくつかバリエーションをもつて伝わっている。

これら現存作例については、個別の詳細な作品解説⁽²⁾がなされているが、諸本間の図像の差異には検討の余地が残る。わたくしは特に金剛杵と金剛鈴を執る一手に注目し、現存する絵画作例や図像類に表された大勝金剛の図像を二つに分類した上で、京都・悲田院本の中尊・大勝金剛の図像は特異であることを指摘し、そこには十二世紀後半の醍醐における『瑜祇經』の解釈と大勝金剛の尊格理解が色濃く反映されている可能性があることをすでに指摘している⁽³⁾。

歴博本もまた大勝金剛画像では類をみない図像で、大勝金剛の尊格理解や特殊な事情が反映されている可能性がある。

そこで歴博本の図像的特徴を指摘し、この図像がどのような尊格理解とともに継承されたかを探ることで、歴博本の制作背景について一試論を示してみたい。

一 所依の經典と大勝金剛の図像

大勝金剛について説く『瑜祇經』は唐・金剛智訖、一説に不空訖とされ、開元錄や貞元錄にみえず、梵本やチベット訳も知られていないことから中国における偽作とされるが⁽⁴⁾、日本へは空海（七七八～九二七）をはじめ、諸人唐家によって請來されて重んじられ、注釈書や口決が著された。『瑜祇經』は空海請來時には『金剛頂經』系經典とされていたが、東密では平安時代後期頃から金胎両部而二不二の經典と理解されるようになる。鎌倉時代以降『瑜祇經』所説の尊格について記す事相書では両部而二不二の側面が強調されるようになる⁽⁵⁾。

現在、『瑜祇經』は二巻十一品からなり、序品に『瑜祇經』全体の源底

が示され、続く十一品はそれを開説したものであるという⁽⁶⁾。大勝金剛の本拠は『瑜祇經』のうち「一切如來大勝金剛心瑜伽成就品」第七（以下、第七品）と、「一切如來大勝金剛頂最勝真実三昧耶品」第八（以下、第八品）である。

『瑜祇經』第七品は、「愛染王品」第五、「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切處瑜伽四行摸法品」第六とともに愛染明王について説くが、大勝金剛の種子も明らかにしている。『瑜祇經』第七品の概略は、金剛手が金剛薩埵身を成就するための真言とその効能を説く諸菩薩が会座する場に、突然一障者が忽然と現れる。諸菩薩はこの障者がどこから来たのかわからないが、薄伽梵がこの障者は一切衆生の本有俱生の障で、自我所生の障であると説明すると、障者は金剛薩埵に変身し、仏の聖旨を受け、自性障（自我所生の障）の金剛頂法を説き、愛染王の根本一字心すなわち大勝金剛心〈ウン〉を体得すれば、自性障そのものが金剛身となると示し、金剛薩埵は消失するという内容である。ここで説かれる〈ウン〉字が広く大勝金剛の種子とされてきた。

第八品には大勝金剛の形像や功德を記し⁽⁸⁾（句読点、傍線、：の略記号は、わたくしによる。種子は〈 〉内にカタカナで表記した。以下同じ。）、

爾時遍照薄伽梵、復現種種光明。於頂上放金剛威怒光明、照諸菩薩。金剛手等皆各默然。復現身手。具十二臂。持、智拳印。復持五峯金剛、蓮華、摩尼、羯磨、鉤、索、鎖、鈴、智劍、法輪、十二大印。身住千葉大白蓮花。身色如日。五髻光明。其光無主遍於十方。面門微笑。即說大勝金剛頂最勝真實大三昧耶真言曰、

〈オン〉〈マ〉〈カ〉〈バ〉〈ザロウ〉〈シユニ〉〈シャ〉〈ウン〉〈タラク〉
〈キリク〉〈アク〉〈ウン〉

説此明已復説頌曰：刀兵不能害 水火不焚漂：若誦一百八 能滅百

劫罪 若誦一千遍 能成滿意願 若誦一洛叉 得大金剛身 若誦一
俱胝 得成遍照尊

像抄に掲載され、以降これについて検討してゆきたい。

二 歴博本の図像と様式

歴博本の基本情報をみる。

と、遍照薄伽梵すなわち大日如来が十二臂の身を現し、それぞれに智拳印を結び、金剛杵、蓮華、摩尼、羯磨、鉤、索、鈴、智劍、宝輪を持つ

といい、日のような身色で千葉大白蓮華に住し、五髪から光明を放ち、面貌には笑みをたたえた姿を説く。これに続けて大勝金剛頂最勝真実大三昧耶の真言を明らかにし、この真言を誦せば、戦禍を退け、滅罪や満願に加え大金剛身や遍照尊を得るという。

現存する大勝金剛に関する絵画作例は、概ね『瑜祇經』第八品所説の形像にしたがうが、智拳印を結ぶ二手以外の十臂における持物の入れ替わりや位置に異同が生じている。これらのバリエーションについて、わたくしは金剛杵と金剛鈴を執る手の位置に注目し、大きく三つに分類を試みた。これはすでに拙稿にまとめたので、ここでは簡略に述べる。

まず両脇に広げた脇手十臂のうち左右一手にそれぞれ金剛杵、金剛鈴を執る像容である。『瑜祇經』第八品に説く持物に入れ替わりがあつたり、持物を執る手に異同があつたりといくつかのバリエーションがある。現存する絵画作例や図像類のなかで最も多いのがこの形像である。

二つめに右手で金剛杵を胸の高さで持ち、左手に執る金剛鈴を腰に当てる形像である。悲田院本大勝金剛曼荼羅の中尊・大勝金剛と、悲田院本と材質技法や法量、図様や諸尊の図像がよく合致する醍醐寺本の中尊、愛媛・石手寺本に限られ、図像類には類例が見出せない。

そして三つめが金剛杵と金剛鈴を腹前で並び立てる形像で、画像作例では歴博本のみである。図像類では恵什（一〇六〇—一一四五）編『図

大小四角形の絹を縦横に継ぎ合わせ、縦六十三・五、横四十一・五cmとした画面に、蓮華上の大勝金剛を描く。

大勝金剛は一面二目十二臂の菩薩形で、光背を負い、左脚を上にして蓮華に坐す。白毫相、三道相を表す。高髪を結い、両肩には波状にした髪を垂らし、耳前に一条の髪を通す。十二臂は左右第一手を胸前で智拳印に結び、腹前で右手に金剛杵を、左手に金剛鈴を立てて持ち、右の脇手は上から宝珠、鉤、鎖、劍、左の脇手は上から蓮華、羯磨、索、法輪を執る。肉身は赤色である。上半身には条帛、下半身には裳と腰布を着し、宝冠、冠繪、耳飾、胸飾、瓔珞、華鬘、臂钏、腕钏で身を莊嚴する。歴博本は『瑜祇經』第八品に説く持物や身色と合致し、蓮華に坐すのも経にしたがう。ただし光を発する五髪については、歴博本の当該箇所が料絹の傷みのために判然としないながら、五髪とは距離がある。

次いで歴博本の表現を観察する。

頭部は頬が張った丸に近い卵型の顔で、肉付きのよい丸い肩に、十二臂は丸々としており、脚部は豊かな膝幅と厚みをもつ安定した体形である。両脇に広がる脇手や持物には小さくまとまつた卑弱な印象は感じられない。眉は緩やかな山なりで、眼は幅広につくる。鼻は鼻梁をもたず小鼻のみで人中をU字に表す。

肉身は赤色で頬や顎、三道の外側、肩、上腕、足には朱隈を重ねる。肉身の輪郭線は現状やや薄い墨線である。この墨線の上に身色の赤が重なっている箇所がある。伝統的な手法では最後に朱線あるいは墨線による

肉身の輪郭の描き起こしがなされるが、現状でそれを認められる箇所がない、当初の様子を判断し難い。額毛の描き起こし線は弱弱しい。両眉はなだらかに弧線を描き、両眼の上瞼は、眼頭に鋭く筆を入れ、緩やかに下方へと弧を描いて目じりでわずかに立ち上げ横方向へのびる。唇は朱色で平塗りとし、上下唇の合わせ目は濃黒色で、両端から中央にわずかに弧を描く線と、中央で下向きに尖る線をもつて表される。瞳は黒色、虹彩は群青かと思われる色を細墨線で括る。目頭と目じりにも具の色を施していたようで、伝統的な手法も散見される。頭髪は群青色だが、頭頂部は摩耗し、また白くなつており判然としない。

条帛、裳、腰布は白を地色とし、現状黒にみえる色で文様を描く。条帛は一条の線で周縁と内側を区画し、内側には立涌文を表し、その間を重ねた杏仁形で埋め、周縁部には蔓草花文を描く。裳は、脛前までの広範には四つの菊花を寄せ中央に菱をおく团花文を配置し、脛前に連珠文帯を上下に置き、その間を菊花草入りの三重格子文とし、脛前から裾部には方形渦巻入りの格子文で、裾には唐草花文を置く。ただし裾の裏側は連珠文帯としている。腰布は草花文で縁には連珠文帯を置く。衣摺と輪郭の線は金泥線とし、その間に白緑色を施す。

頭飾は花葉を正面と左右に置く意匠で、花は赤色の綾綢彩色、葉は白緑の彩色が確認できる。冠繪は両耳の上で小さめの輪をつくり、背後に下げ、布端が脇手の後ろにのぞく。白色で輪郭線および衣摺線は金泥とする。装身具や持物の金属具は、現状茶色に墨線で輪郭や意匠を描き起こす。金剛杵の一部に墨線の描き起こしに金泥を添わせるが、不自然で当初とは考えにくい。装身具や瓔珞に用いられる珠は赤や白、群青で、白色を点じて、そのきらめきを表出す。

蓮華座の蓮弁は群青色・紫色系と、緑色・赤色系との二種類があり、そ

れぞれ縹緲彩色とし、蓮弁の輪郭の墨線に白色の細線を沿わせる。慈頭は白みが強い朱具で点描し、弧線状に三段に列する丹念な描写である。

以上、簡単に歴博本の表現を観察した。平安時代以降の伝統的な描法を部分的に残し、また襞線の間の白線などには十二世紀後半に好まれた色彩が認められる。一方で頬の張った丸い卵型の顔に、うねりをもつ上面線と眼の縦幅の中央に据えられた瞳による意志的な表情は、十三世紀初頭とされる個人藏孔雀明王像⁽¹⁰⁾や鎌倉時代初期の滋賀・法藏寺藏如意輪觀音像⁽¹¹⁾、鎌倉時代前期の制作とみられる醍醐寺・虛空藏菩薩像⁽¹²⁾などに近しいと思われる。また白地に現状黒色で文様を置き、輪郭と襞線を金泥線とする衣の表現は、文様に相異はあるが先に上げた個人藏孔雀明王像にみられ、こうした表現は、京都・安樂寿院藏孔雀明王像や京都・高山寺藏仏眼仏母像、ボストン美術館藏一字金輪像など、平安時代末から鎌倉時代にかかる仏画や、鎌倉時代初期から前半にかけての仏画にみられる⁽¹³⁾。蓮華座について、歴博本の構成および彩色が類似するものに、十三世紀前半の東京国立博物館藏般若菩薩像があり、これは醍醐寺藏大日金輪像や虚空藏菩薩像に近しい⁽¹⁴⁾といふ。

このように十三世紀初頭から前半の作品に親近性が認められるが、頭光や身光の外側を覆う火焰は形式的で、またその輪郭を黒線で表すさまは、明確に描き出そうとする意識がより強くみてとれ、平明さを感じさせる。ただ十三世紀後半頃からみられるようになる金属具を金泥で彫塗のように彩色する表現はいまだ認められない。肉身の描き起こし線がみられない点で判断を難しくしているが、歴博本の制作時期は、今のところ十三世紀中頃と位置付けておきたい。

なお白地に現状黒色の文様を描く衣の表現について、大勝金剛が智拳印を結ぶことから『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成仏儀軌』所



図2 『図像抄』所収大勝金剛



図3 『別尊雑記』所収大勝金剛

説の一宇金輪の像容「形服如素月」⁽¹⁵⁾が想起される。小野醍醐では大勝金剛の正体を一字金輪仏頂尊とするが、後述するように歴博本は図像から考へるに、醍醐で相承され重んじられた図像ではないようと思われる。現段階では歴博本のこの表現について答えを持ち合わせない。

三 図像の典拠とその相承

勝金剛⁽¹⁷⁾に（割註は×）内に記し、改行を／で示す。以下同じ。）、

大勝金剛

種子〈ウン〉

三形 剣 或五古

尊形

經云。身色如日暉。五髻光明。具十二臂。持智拳印。又持五古、蓮

花、宝、羯磨、鉤、索、鎖、鈴、劍、法輪。住千葉大白蓮花印 内
縛忍願屈如頂〈口決云頂／者劍形也〉

：

師說智拳印用之

此尊功德能深甚也。可引見經文〈云／々〉



図4 『諸尊図像』所収愛染曼荼羅図

図5 『諸尊図像』所収愛染曼荼羅図
部分

と、種子、三昧耶形、そして尊形について『瑜祇經』第八品を簡略に引用し、本尊加持の印相を記し、その功德の奥深いことを述べ、蓮華に坐す五髻の大勝金剛像を掲げる。『图像抄』所収の图像は、左右の一手で智拳印を結び、また右の一手で金剛杵を、左の一手で金剛鈴を腹の前で持つ。ほかの八臂は身体の脇に広げ、左手は上から蓮華、羯磨、索、宝輪、右手は上から宝珠、鉤、鎖、宝劍を執る。なお鳴滝常樂院伝來の『图像抄』には、「智証大師請來像如此（云々）或有宝冠」と朱書があり、これは後述するように心覚編『別尊雜記』や覚禪（一一四三—一二一三以後）編『覺禪鈔』に引用されていて、この图像が智証大師請來像とみなされ、また宝冠をいただく大勝金剛の存在を物語る。¹⁹⁾

惠什がこの图像を得た経緯については、惠什口・覚印（一〇九七）一六四）記『諸口伝集（自言）』「五十一 大勝金剛形像事」に、

問十二臂大日瑜祇經中專殊勝說之。而有图像形像先証乎。答云、件
仏瑜祇經肝心只是也。仍大師以件仏為本尊殊作次第也。於形像者二
井寺有唐本像。先年所奉尋拜見也。彼寺為究竟秘事云々。

と、『瑜祇經』においてとりわけ格別に説かれる十二臂大日すなわち大勝金剛の图像に、然るべき先証があるかという問い合わせに対し、究竟の秘事たる三井寺の唐本像を挙げ、それを先年に拜見したと答えている。この記述は覚禪編『覺禪鈔』²¹⁾でも部分的に引用され、惠什が图像を収集する経緯をよく伝えているといえる。とすれば、『图像抄』所収の图像は三井寺の唐本像とされていたものを写し得た、台密所縁の图像であつたといえる。²²⁾また『諸口伝集（自言）』のなかで、惠什が大勝金剛を十二臂大日

として『瑜祇經』の肝心と位置づけていること、そしてそれ故に空海が大勝金剛を本尊として次第を作成したと語る点で興味深い。

さて心覺編『別尊雜記』卷第二十九うち「大勝金剛」には、惠什と実運の二師の説を記す。惠什説の引用後に五髻三目忿怒形像、五髻菩薩形像、宝冠菩薩形で索でなく牙を持す意樂像、そして歴博本と図像が一致する宝冠菩薩形の四図の独尊像と、大勝金剛曼荼羅一図が所収される。独尊像三図めの後に、⁽²³⁾

或云

智証大師請來唐本愛染王万多羅中在此像

銘云十二臂大日云々

私云已上三体以宮法印御房御本写加之了

と、智証大師請來の愛染曼荼羅中に十二臂大日の銘が付された大勝金剛像があるという説を書き添え、また心覺が前の三図を仁和寺の花藏院宮法印元性本を以て写したと註す。

智証大師請來の愛染曼荼羅とは、心覺撰『諸尊図像』巻上所収の愛染曼荼羅図（図4）の類であろう。「可尋他門事歟」⁽²⁴⁾と註された本図には、図中向かって左上の尊格の傍らに「大日十二臂」と記されている（図5）。宝冠菩薩形の十二臂で、その持物は『瑜祇經』第八品に説くところにしたがう大勝金剛である。この種の愛染曼荼羅図は、後述するように覚禪編『覚禪鈔』にも所収され、承澄（一二〇五～一二八二）編『阿娑縛抄』第一五「愛染王」では尊位図が示されるほか、ニューヨーク、バークコレクションの愛染曼荼羅図が伝わっている。これらを参照すれば、愛

染曼荼羅図の構成は、中央に愛染明王、その後ろに弥勒菩薩、前に觀音

菩薩、左に宝幢、右に俱利伽羅剣、左上に両頭愛染、左下に不動明王、右下に大威德明王、そして右上が大勝金剛となる。

パークコレクション本の大勝金剛像は、『別尊雜記』掲載の一図や歴博本と図像が一致している。パークコレクション本の料紙背面の左端に、「嘉承二年三月五日、以三昧阿闍梨書了件本云、大原僧都御本云々」⁽²⁵⁾と墨書があり、嘉承二年（一一〇七）に大原僧都長宴（一一〇一六～一一〇八一）本をもとにした三昧阿闍梨良祐本を以て作られた経緯を示していることから、台密のなかでも叡山において相承された図像であつたとされる。⁽²⁶⁾

さらに皇慶（九七七～一〇四九）口説・長宴記『四十帖決』巻第八「愛染王 二十三」⁽²⁶⁾には、

愛染王曼陀羅ノ中尊弓箭。或箭懸レ弓云々 今不懸是佳也。又

前瓶吐レ宝ヲ。数可レ隨レ宜耳。無定數耳。前観音、巽ハ大威德歟。

坤ハ大勝金剛。上ハ弥勒。乾ハ火天歟。艮ハ不動。私案ルニ、左右ノ二印

是闕テレ位安スルレ之歟。可レ問。師曰。一是宝幢也。一ハ俱哩迦羅也。大

勝金剛ト者。彼經ノ第八品云、遍照薄伽梵、復現身手具十二臂。

持智拳印。復持五峯乃至輪。已上寛德三ノ年四月上旬。於谷御ノ房ニ詔ノ受要事ノ等。長宴記之

永承三年三月下旬於谷御房決之云々

とあり、その図様と寛徳三年（一一〇四六）に長宴が「谷御房」すなわち皇慶から諮詢受したことがうかがえる。

さて覚禪編『覚禪鈔』巻第八十一「愛染法」⁽²⁷⁾下では、この図様の愛染曼荼羅図を掲出し、

右曼荼羅図、有安養房抄、皇慶閣梨、三井山王院大師、被渡愛染王

〈マ〉〈タ〉〈ラ〉一幀。爰有北山隱士、竊作釈云、前後二尊慈悲一
也。所謂弥勒大慈三昧尊、觀音大悲行門士也。左右二三昧耶福智一
双也。幢表福、劍表智也。艮坤二尊。主伴一双也。大日主。不同使
者也。巽乾二尊愛憎一双也。其義顯然也。〈彼大師之御持念目録中〉
有此 〈マ〉〈タ〉〈ラ〉。無其法名〉：

と、安養房芳源の抄にこの愛染曼荼羅図が収められ、三井山王院大師円珍の請來であるという。円珍請來は皇慶の伝であろうか。そして北山隱士が密かに作った解釈——愛染明王の前後の弥勒菩薩と觀音菩薩は慈悲の
一雙であり、左右の宝幢と俱利伽羅劍は福智の一雙であり、艮坤の大日如來と不動明王は主伴の一雙であり、巽乾の二尊は愛憎の一雙であると
いう、愛染明王を中心に対称に位置する尊像の関係性——を記している。こ
こに北山隱士の釈では愛染曼荼羅の艮に位置する尊格を「大日」とする
理解がみてとれる。

現在のところ北山隱士について明らかにし得ないが、惠什が石山淳祐の付法に連なり、淳祐—真頼—雅真—曆海—遍日—修仁—増蓮—芳源—
惠什⁽²⁸⁾という法流を思えば、芳源から惠什へこの大勝金剛の図像とともに、
大勝金剛を「大日」とする理解が相承された可能性は大きいにあろう。⁽²⁹⁾

以上より歴博本の一腹前で金剛杵と金剛鈴を並べ立てて持つ点を特徴

とする——図像は、『図像抄』や『別尊雜記』所収図と一致し、その図像の由来を遡れば、円珍ないし三井寺に由縁をもち、惠什が直接または師芳源を経由して収集した可能性のある図像——いうことができる。また五髻か宝冠かの違いに拘わらず、大勝金剛を十二臂大日と理解していたこと
がうかがえた。

四 大勝金剛の尊格理解と大勝金剛法

ここまで歴博本の図像は惠什所伝の大勝金剛図像に典拠が求められ、また惠什が大勝金剛を十二臂大日と理解していたことを確認してきた。本章では歴博本の制作背景と目的について、惠什の尊格理解と所伝の図像を手掛かりに検討してみたい。

『瑜祇經』に説く尊格の理解は諸宗諸流派で一樣でないことはすでに指摘されている。光宗（一二七六—一三五〇）編『溪風拾葉集』「仏眼法事 秘曲」⁽³⁰⁾には、

尋云、彼經有二十二品。此品品皆教主アリ。一一ノ尊又經ノ總体ト見タ
リ。仍弘法大師ハ以愛染⁽³¹⁾為一經ノ總体。智証大師⁽³²⁾、大勝金剛品以
為一經總体ト。山門流ニ何カ故ソ以仏眼⁽³³⁾獨此ノ經ノ總体云ハシ耶。示
云、弘法大師⁽³⁴⁾相承⁽³⁵⁾様以愛染⁽³⁶⁾為經體ト。其ノ故ハ愛染三面六臂左
面⁽³⁷⁾仏眼、右⁽³⁸⁾面⁽³⁹⁾金輪、中⁽⁴⁰⁾面⁽⁴¹⁾愛染也。故以テ兩部不二⁽⁴²⁾總体⁽⁴³⁾為
愛染ト。今ノ經又両部不二⁽⁴⁴⁾經王也。尤以愛染⁽⁴⁵⁾為經體⁽⁴⁶⁾。其義甚深
也。已上東寺流義。

次智証大師⁽⁴⁷⁾、御相承様⁽⁴⁸⁾、大勝金剛者一身⁽⁴⁹⁾十二臂アリ。此ノ一一ノ印相⁽⁵⁰⁾
十二品ノ法門⁽⁵¹⁾表示セリ。故⁽⁵²⁾大勝金剛⁽⁵³⁾以一經ノ總体トシ給ヘリ
已上三井寺流義。

次慈覺大師⁽⁵⁴⁾、御相承様⁽⁵⁵⁾、以⁽⁵⁶⁾二仏眼⁽⁵⁷⁾為一經ノ總体⁽⁵⁸⁾。今ノ經ノ中⁽⁵⁹⁾仏眼
題号⁽⁶⁰⁾置⁽⁶¹⁾吉祥成就品ト題セリ。吉祥者妙ノ義、成就者悉地義。故⁽⁶²⁾吉祥
成就妙成就蘇悉地⁽⁶³⁾名号也。

と、十四世紀頃の『瑜祇經』所説の尊格に対する理解がみられる。東寺、

すなわち東密では愛染明王を、寺門では大勝金剛を、山門では仏眼仏母を『瑜祇經』の總体とするという。寺門においては大勝金剛の十二臂とその印相を『瑜祇經』の十二品と結びつけ、大勝金剛を『瑜祇經』の總体としていたが、慶範（一一五五～一二二二）撰『寶秘記』八「瑜祇經十二品始終事」^{〔32〕}には、

予申云、禪仁物語云、瑜祇經十二品、東者人併愛染王、山門人説仏眼法也、^此同此門跡如何云々、此条如何。仰云、始終何法云申、不可習学之、但存旨ハ仏眼或愛染王品々不定也、四品愛染王儀伝受、然者又余品愛染王トモ不可習之歟

と、『瑜祇經』十二品を東密では愛染王、山門では仏眼法を始終説いていきことを挙げ、寺門派ではいかんとするか、という問い合わせに対する慶範の師・真円の答えからは、この習いを受けていなかつたことが読み取れる。一方で大勝金剛を本尊とした別尊法に注目すれば、『門葉記』勤行法二「一。常途勤行御修法等事」^{〔33〕}で、東密、山門、寺門で勤行される修法をそれぞれ大法、准大法、秘法と整理するなかに、

秘法

：

如意宝珠

大勝金剛

転法輪

五大虚空藏

已上東寺修之

と大勝金剛は秘法のうち「東寺修之」とされているから、大勝金剛法はもっぱら東密で勤修されていたとみてよさそうである。そこで以降は、東密に注目して大勝金剛の尊格理解の様相をみてゆきたい。

醍醐の学匠・教舜（一二六四頃）は、『秘鈔口決』第十八「大勝金剛法」^{〔34〕}で、大勝金剛の理解について東密諸師の説とその根拠を挙げている。少々長いが引用してみれば、

秘法生起事

惠什云、十二臂大日ナリ。〈ユ〉〈ギ〉經専ラ殊勝説レ之ヲ。彼ノ經ノ肝心只是也。仍テ大師以件仏為本尊。殊作次第也。於形像者三井寺ニ有唐本絵像。先年所奉拜見也。彼寺為究竟ノ秘事云々。又云、十二臂大日說ノ彼經十二品云々。或曰云、〈實任〉今法最極甚深究竟ノ秘法。而近來絕事歟。或云、尊勝軌云、今礼、〈ユ〉〈ギ〉、〈ユ〉〈ギ〉是大日尊文依レバ今尊也云々。鳥羽僧正云、大勝金剛、十臂、愛染王ト習フ事、仁和寺秘事云々。覺禪抄云、問云十二臂ノ像雖出ツ、〈ユ〉〈ギ〉經第八品、不ルハ云愛染王ト如何。答、御經藏在、此圖而已。無シ他様ノ像之。大師御書付云、愛染王也云々。或云、大勝金剛者十二臂、金剛薩埵也。宝樓閣經ニ説十二臂金剛薩埵。但シ彼經ニ不出持物。此經ニ説持物。又彼經説、一身四面十二臂ナリ。此經説、一身十二臂云々。宮僧正覚源十二臂金剛薩埵云々。四面表四部、雖一面ナリト四德宛然ナリ。仍テ非相違歟云々。御口云、付テ此尊師師伝雖不同ガリ一所レ詮スル、當流ハ習フ。摂切仏頂輪王ト為正伝也。

と、まず惠什の説について、先述した『諸口伝集〈自言〉』を引用し、大勝金剛を十二臂大日とみなすことを記す。勸修寺実任（一〇九七～一六九）は大勝金剛法を「最極甚深究竟秘法」とする。文脈からは実任もまた同様の理解をしていたとみてよからう。次いで鳥羽僧正範俊（一〇三八～一一二）の、大勝金剛を愛染明王とすることは仁和寺の秘事であるという伝を引く。さらに宮僧正覺源らの大勝金剛は十二臂の金剛薩埵であるとする説をあげる。そして最後に諸師の伝は「通りでないが、醍醐においては摂一切仏頂輪王を正当とする」と、教舜が連なる自流の主張を述べる。大勝金剛を十二臂大日とみなす惠什の伝は、十三世紀の東密諸流の解釈のうちの一つであった。ここからは惠什が大勝金剛を十二臂大日と理解していたことに加え、大勝金剛は『瑜祇經』の肝心でありそれが故に空海が大勝金剛を本尊として次第『一切如來大勝金剛頂最勝真言三昧耶品次第觀念』を作成したこと、また大勝金剛の図像が円珍所縁の唐本絵像に由来することがあわせて相伝されてきたようすが認められる。

以上、勸修寺流諸師の事相書類に大勝金剛を十二臂大日とする理解が認められた。十二臂大日とする理解は、惠什の伝としてその図像とともに相承されてきたことを思えば、歴博本の制作背景には小野三流のなかでも勸修寺流における相承があつた可能性を想定できよう。⁴²⁾

最後に歴博本の制作目的について若干の考察を加えてみたい。

大勝金剛を本尊とする大勝金剛法は敬愛法と息災法について修す。⁴³⁾息災法のなかには建保六年（一二一八）の中宮の御產平癒のための大勝金剛法もあつた。そのほか教舜の『秘鈔口決』卷第十八「大勝金剛」には、

空海や惠什の伝は東密のなかでも狭義の小野流で用いられたというから、歴博本が小野流を背景に制作されたことを想定し得る。今、そのいざれかを判断することは難しいが、勸修寺流の事相書類に直接的な影響を見出せるのではなかろうか。惠什と勸修寺寛信（一〇八四～一五三）との交わりは、惠什が写した芳源書写の慈円編『曼荼羅問答』を寛信が筆写したという奥書を有する写本や、惠什口・寛信記の『諸尊法』一巻の存在から明らかにされている。³⁷⁾寛信が『伝受集』巻第四「愛染王二十二」で「或云、愛染王曼荼羅、大日十二臂也云云」³⁸⁾というのにはこうした背景がある。また興然（一二〇一～一二〇三）が寛信、明海、実任、觀祐の四人の師から受法したものを集めた『四卷』第二「大勝金剛

法」では「本、十二臂大日」と、別尊法の本尊を十二臂大日と定めている。観禪編『観禪鈔』では先に挙げた寛信や実運の説を引用するほか、善無畏訖『尊勝仏頂脩瑜伽法儀軌』巻上「尊勝真言序品第一」の「是故我今礼瑜祇 瑜祇即是大日尊⁴⁰⁾」を引用して、「依此文者、瑜祇即十二臂大日也。故經始終、偏依今尊也⁴¹⁾」と『瑜祇經』が始終十二臂大日を説くことの憑証としているのである。

以上、勸修寺流諸師の事相書類に大勝金剛を十二臂大日とする理解が認められた。十二臂大日とする理解は、惠什の伝としてその図像とともに相承されてきたことを思えば、歴博本の制作背景には小野三流のなかでも勸修寺流における相承があつた可能性を想定できよう。⁴²⁾

最後に歴博本の制作目的について若干の考察を加えてみたい。

大勝金剛を本尊とする大勝金剛法は敬愛法と息災法について修す。⁴³⁾息災法のなかには建保六年（一二一八）の中宮の御產平癒のための大勝金剛法もあつた。そのほか教舜の『秘鈔口決』卷第十八「大勝金剛」には、

経云、若末世ノ人長ク誦ハ此真言ヲ、刀兵不能レ害ヲ水火モ不ニ焚漂一文 或人云、師云、大勝金剛法ハ息災敬愛共ニ可レ修レ之也。鎌倉大將頼朝兵乱合戦ノ時、大勝金剛ノ真言ヲ鎧ノ袖ノ下ニ金物ノ境ケニ打レ之、袖上ニ勝ノ字ヲ書テレ札ニ付レ之。即依ル一今文一歟

と、息災と敬愛に加え、『瑜祇經』第八品が説く大勝金剛の真言を誦すことで得られる兵難を退ける功德を引用し、頼朝が合戦に際し大勝金剛真言を鎧下の金物境に打ち付けたという伝承が記される。

ここで再び惠什説・覚印記『諸口伝集〈自言〉』「五十一 大勝金剛形像事⁴⁶⁾」をみれば、

近大和国有聖人多遇賢哲學秘法。件聖人殊為祈寿命百日修此法。有夢想告、保九旬暇筭。親謁之〈云／々〉

と、大和国の聖人が賢哲より学んだ秘法で百日の寿命を得ることを祈願したという恵什の口伝が記されており、息災法のなかでも延寿を目的とした修法は注目される。

修法と図像の関係で興味深いのは、醍醐寺に伝わる貼紙墨書に「宗命

本」と記される大勝金剛図像（以下、宗命本）である。宗命（一一一九—一二七二）は醍醐・理性院流の人で、保元二年（一一五七）十二月二十二日から百カ日、美福門院の仰せにより、高松女院の不祥や悪事、悪人、怨念の消除と、宮内の安穩等を目的に大勝金剛供を行つた。その卷数が『覚禪鈔』卷第十六「大勝金剛」⁽⁴⁷⁾上に記録される。この大勝金剛供には法驗があり、宗命本はこの時の本尊画像の図像をとどめている可能性が指摘される。⁽⁴⁸⁾

『瑜祇經』に関係する画像では、『瑜祇經』所説の尊格の別尊法における本尊画像のほかに、『瑜祇經』序品に基づく瑜祇灌頂で用いられたとみられる三昧耶形図⁽⁴⁹⁾や『瑜祇經』金剛薩埵菩提心内作業灌頂悉地品第十一所説の「十五尊布字住所」の図像の存在が明らかにされており、しかも両者ともに称名寺に伝わり、勧修寺流の法脈のなかで用いられたものであるという。⁽⁵⁰⁾

『瑜祇經』第八品には阿闍梨の行法が説かれ、これに基づく空海の観念次第がある。また安然『金剛峰樓閣一切瑜祇經修行法』にみえる阿闍梨の行法の解釈は東密の事相書類でも引用される。覚禪は『覚禪鈔』卷第十六「大勝金剛上」で引用したのち「愚案云、序品〈マ〉〈タ〉〈ラ〉、中尊大日十二臂歟。秘彼品説今品歟。」と、序品と第八品の三十七尊曼荼羅のうち延寿を目的とした修法本尊として制作された可能性を想定するとともに許されよう。

おわりに

本稿では歴博本の図像が、恵什が相伝したであろう愛染曼荼羅に配される大勝金剛と図像的特徴を共有していることを指摘した。これは現存

する大勝金剛画像では類例のない図像である。また恵什は大勝金剛を『瑜祇經』の肝心である十二臂大日とする理解を示し、後世の図像集や事相書類にはこの図像とともに大勝金剛を十二臂大日とする理解が所収されていた。こうした恵什の習いは小野三流にみえるとされるが、わたくしはそのうち特に勧修寺流の相伝のなかに恵什の習いを見出し、歴博本の制作背景と想定した。さらに歴博本が恵什所伝の図像に基づく事情をうかがい知る上で、考え得ることとして恵什口伝の延寿を目的とした修法本尊としての可能性を示した。

註

(1) 『再編十周年記念 館蔵美術工芸名品展』 神奈川県立歴史博物館、二〇〇五年四月、六頁。

(2) 参照した大勝金剛画像の主な作品解説は以下。

① 真保亨 作品解説「大勝金剛曼荼羅」『別尊曼荼羅』毎日新聞社、一九八五年十二月、一三六頁。

② 作品解説「大勝金剛像」『秋期特別公開図録 東寺と「太平記」』東寺(教王護國寺)宝物館、一九九一年九月、二二一頁。

③ 泉武夫 作品解説「大勝金剛曼荼羅図」『王朝の仏画と儀礼』至文堂二〇〇〇年十一月、三六六頁。

④ 有賀祥隆「大勝金剛曼荼羅図」『醍醐寺大觀』二、岩波書店、二〇〇一年五月、解説二二頁。

⑤ 真鍋俊照「密教図像と別尊曼荼羅の構想」『印度学仏教学研究』一三七、日本印度学仏教学会、二〇一五年一二月。

⑥ 有賀祥隆「別尊曼荼羅に就いて」『国華』一四四五、国華社、二〇一六年三月。

⑦ 武田和昭「石手寺の仏画」『四国靈場第五十一番札所石手寺総合調査報告書』愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター、二〇一七年三月、三九頁。

⑧ 佐々木大樹、那須真裕美 図像解説「大勝金剛曼荼羅」『曼荼羅集 興然編 上巻』、同朋舎新社(合同会社DOHOP)、二〇一九年六月、七十九頁。

⑨ 林温「別尊曼荼羅と日本の密教」『曼荼羅集 興然編 上巻』、同朋舎新社(合同会社DOHOP)、二〇一九年六月、三二四頁。

(3) 樋口美咲「京都・悲田院所蔵大勝金剛曼荼羅に関する一考察」『密教図像』四十

四、密教図像学会、一〇一五年十二月(発行予定)。

(4) 三崎良周「台密の研究」創文社、一九八八年六月、一三七頁。
ただし中村元東方研究所田中公明氏のご教示によれば、『瑜祇經』第八品に説かれる大勝金剛の一面十二臂のように、一面二臂の金剛界大日に脇手を付加する图像について、パーラ朝時代には一面二臂で智拳印を結ぶ金剛界大日に脇手を付加

する四面八臂像が出現すること、アバヤーカラグプタの『ニシュパンナ・ヨーヴィアリ』に四面八臂の金剛界大日を説き、ネパールにはその作例が伝わることなどから、一面二臂の金剛界大日に脇手を付加して多面広臂像を作るという発想はインドに存在しており、『瑜祇經』は何等かのインド成立の資料に基づいて編纂された可能性があるという。田中氏の重要な指摘は、前掲註3でも引用させていただいた。

(5) 金胎両部而「不二」については、主に以下を参照した。

① 伊原照蓮「両部不二と瑜祇經」御遠忌記念出版編纂委員会編『弘法大師と現代』筑摩書房、一九八四年三月、四〇九頁。

② 鍵和田聖子「東密における『瑜祇經』解釈の変遷」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三十五、二〇一三年十二月。

(6) 安原賢道「瑜祇經の研究」(一)(二)『密教研究』四十五、四十六、一九三二年七月、十二月。

(7) 有賀祥隆「愛のほとけ—愛染明王」『講座密教文化』三 密教のほとけたち、人文書院、一九九一年八月、一七五頁。

(8) 『大正新脩大藏經』18-1-五八頁b。

(9) 前掲註3。

(10) 泉武夫『仏画の造形』吉川弘文館、一九九五年八月、一五一頁。

(11) 泉武夫 作品解説「如意輪觀音像」『王朝の仏画と儀礼』至文堂、二〇〇〇年十一月、三六三頁、前掲註10、一五七頁。

(12) 吉村稔子 作品解説「虛空藏菩薩像」『醍醐寺大觀』二、岩波書店、二〇〇一年、解説三〇頁。

(13) 前掲註10。

(14) 沖松健次郎 表紙解説「般若菩薩像」『MUSEUM』六・四、東京国立博物館、二〇一〇年一月。

(15) 『大正新脩大藏經』19-1-二二一-a。

(16) 前掲註3。

(17) 『大正新脩大藏經』図像二一一八c。

- (18) 『大日本仏教全書』五一・図像部二、二五七頁上。
- (19) 鳴滝常楽院伝来『図像抄』所収の図の下には「経説小異也十二臂 次第如必要列」と注記するが、「別尊雑記」や「覚禪鈔」に引用されていない。
- (20) 県立金沢文庫所蔵称名寺聖教 二八八函一三四。
- 外題に「諸口伝集（自言）」内題には「口伝記」と記載する。識語は以下の通り
 (改行は／で表記、〔 〕内はわたくしによる)。
- 本云 健保四年五月廿日 於香隆寺之辺書写了／求法末資禪遍／翌日比校了／建長七年七月十四日賜御本同十八日書写終功了／求法末資成遍／及斜日比校了／永仁五年四月十五日賜御本書写了 日〔同カ〕校点了 求法末資良朝 一交了／于時元弘三年十一月十五日賜御本書写了、求法末資禪充。
- (21) 『大正新脩大藏經』図像五・五六一 b。
- (22) 田村隆照「図像抄 成立と内容に関する問題」『仏教芸術』七十、毎日新聞社、一九六九年三月。
- このなかで『覺禪鈔』の「十卷抄云智証請來像如此云々 或有宝冠云々」という書き込みをもつて間接的に請來像とみなされている。
- (23) 『大正新脩大藏經』図像三・三五七。
- (24) 仏教美術研究上野記念財団助成研究会研究報告書『図像蒐成』IX、一一〇〇四年三月、一〇頁。
- (25) 柳澤孝 作品解説「愛染曼荼羅」『在外日本の至宝』一 仏教絵画、一九八〇年九月、一五二頁。
- (26) 『大正新脩大藏經』75-八九九 a。
- (27) 『大正新脩大藏經』図像五・二五七 a。
- (28) 醍醐寺本「灌頂師資相承血脉」築島裕翻刻『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一
- (29) 芳源ならびに恵作については、川村知行「白描図像の伝来における醍醐寺本図像抄に関する調査研究」（課題番号一〇六一〇〇五七 研究成果報告書、一一〇〇一年三月）を参照した。
- (30) 鍵和田聖子「日本密教における『瑜祇經』諸説の尊格理解」『印度学仏教学研究』一三七、一一〇一五年十二月。
- (31) 『大正新脩大藏經』76-五五四 b。
- (32) 『園城寺文書』七、園城寺、一一〇〇四年八月、一二三四頁上。
- (33) 『大正新脩大藏經』図像十二・四二四 a。
- (34) 『真言宗全書』二十八、一九八頁上。
- (35) 『一切如來大勝金剛頂最勝真言三昧耶品次第觀念』については、真保龍敏「弘法大師と『瑜祇經』」（御遠忌記念出版編纂委員会編『弘法大師と現代』筑摩書房、一九八四年三月、四三七頁）を参照した。
- (36) 上田靈城『真言密教事相概説』—諸尊法・灌頂部—〔上〕同朋舎出版、一九八九年十二月、二二〇頁。
- (37) 前掲註29。
- (38) 『大正新脩大藏經』78-二五一 c。
- (39) 『大正新脩大藏經』78-八〇一 a。
- (40) 『大正新脩大藏經』19-三六八 b。
- (41) 『大正新脩大藏經』図像四・五六一 b。
- (42) なお小野流の「ある安祥寺流では、流祖宗意（一〇七四～一二四八）から法流を継承した寒巖（一一八五頃）が安祥寺寺域に建てた大勝金剛院を中心に伝流した」というが（梶川敏夫・上原真人「第一章 安祥寺の歴史と環境」「安祥寺の研究科」二世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」、二一頁）、大勝金剛をどうのよう理解していたかは明らかでない。時代は下るが
 淨巖（一六三九～一七〇一）『最秘部類集』「大勝金剛」（国書データベース
<https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/100223619/69?ln=ja>）（一一〇一五年五月三十日最終閲覧）には、
- 此ノ尊ハ十二臂ノ大日ト習也、又十二臂ノ愛染王トモ習也、又十二臂ノ金剛薩埵トモ習也畢竟三尊亦三亦一也秘密

勝金剛」（国書データベース<https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/100226071/20?ln=ja>）

(一〇) 五年五月三十日最終閲覧、にもみえ

一切如來大勝金剛次第、此大師作。此尊總為等者凡論此瑜祇經總体。有其三

伝一曰仏眼三昧（山／門）、二曰大勝金剛三昧（三／井）、三曰金剛薩埵三昧
亦愛染三昧（東／寺）。此中金剛薩埵三昧傳即總諸說也。何者如彼仏眼、大勝
金剛、愛染以薩埵為其本身、此大普賢金剛薩埵即修生大日如來也。

とあり、諸宗諸流で説く仏眼仏母、大勝金剛、愛染明王のいずれも金剛薩埵（大
普賢金剛薩埵）に帰すという。

(43) 敬愛法とするものに実運編『秘藏金宝抄』「大正金剛法」、勝賢記・守覺輯『秘鈔』
第十一「大勝金剛」、成賢編『薄双紙』二重第二結「諸仏頂」うち「大勝金剛」、
興然編『五十卷鈔』第二十二「大勝金剛法」、賴瑜編『秘鈔問答』卷第十「大勝
金剛」などがある。息災法とするものに興然編『四卷』第二「大勝金剛法」など
がある。

(44) 道範編『ユギソタラン口伝』下「大勝金剛頂品」第八の裏書「建保六年〈戊寅〉

仲秋比、中宮御産平安御祈被修大勝金剛法云々此付息災行之歟」（『続真言宗全

書』七、二九頁下）

(45) 『真言宗全書』二十八、三〇一頁上。

(46) 县立金沢文庫所蔵称名寺聖教二八八函一二四、前掲註20。

なお『覚禪鈔』卷第十六「大勝金剛」上「延寿先跡」に引用されている（『大正
新脩大藏經』図像四一五六一b）。

(47) 『大正新脩大藏經』図像四一五六八b。

(48) 林温 作品解説「馬頭・大勝金剛・馬鳴曼荼羅・六字天図像」『醍醐寺大觀』二、
岩波書店、二〇〇一年五月、解説七八頁。

(49) 内田啓一「瑜祇經所説の三昧耶形図について」『密教図像』十八、一九九九年十二月。

(50) 真鍋俊照「三部字輪觀図像の成立」『印度学仏教学研究』五十、一九七七年三月

(51) 前掲註49、50。

(52) 『大正新脩大藏經』図像四一五六一a。